館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第32集

館林市内遺跡発掘調査報告書

下志柄遺跡（平9地点）
間堀2遺跡（平9地点）
北近藤第一地点遺跡（E・F地点）
笹原遺跡（平9地点）
大袋4遺跡（平9地点）

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第32集

館林市内遺跡発掘調査報告書

下志柄遺跡（平９地点）
間堀２遺跡（平９地点）
北近藤第一地点遺跡（E・F地点）
笹原遺跡（平９地点）
大袋４遺跡（平９地点）

館林市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成９年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教育長	髙瀬利一
教育次長	関口久男
主管課	文化振興課
文化振興課長	今井　敏
文化財係長	石井正和
主査	新井直次
学芸員	岡屋英治（担当）　岡屋紀子（担当）　黒澤文隆 阿部弥生　原　幸恵
調査補助員	寺内景子
作業員	石井悦雄　石川栄吉　荻野貴子　荻野秀樹 小倉岳志　川島範子　川島秀規　岸　貴子 小林浩子　坂田岩吉

3. 調査に伴う経費は、国および県より補助を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。
5. 本書の取りまとめは、岡屋英治、岡屋紀子が中心となり行った。
6. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関のご指導を賜りました。厚くお礼申しあげます。

《目　　次》

例　言

第Ⅰ章　館林市の環境 …… 1

第Ⅱ章　各遺跡の調査 …… 4

第1節　下志柄遺跡（平9地点） …… 4

第2節　間堀2遺跡（平9地点） …… 8

第3節　北近藤第一地点遺跡（E地点・F地点） …… 15

第4節　笹原遺跡（平9地点） …… 22

第5節　大袋4遺跡（平9地点） …… 24

抄　録 …… 30

《 図 版 目 次 》

第 1 図　館林市の位置図 …… 1
第 2 図　遺跡分布図 …… 3
第 3 図　下志柄遺跡周辺の遺跡 …… 4
第 4 図　下志柄遺跡（平９地点）調査区全体図 …… 5
第 5 図　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影１ …… 6
第 6 図　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影２ …… 7
第 7 図　間堀２遺跡周辺の遺跡 …… 8
第 8 図　間堀２遺跡（平９地点）調査区全体図 …… 9
第 9 図　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影１ …… 12
第１０図　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影２ …… 13
第１１図　北近藤第一地点遺跡周辺の遺跡 …… 15
第１２図　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）調査区全体図 …… 17
第１３図　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）出土遺物実測図 …… 18
第１４図　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）調査区全体図 …… 20
第１５図　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）出土遺物実測図 …… 21
第１６図　笹原遺跡周辺の遺跡 …… 22
第１７図　笹原遺跡（平９地点）調査区全体図 …… 23
第１８図　大袋４遺跡周辺の遺跡 …… 24
第１９図　大袋４遺跡（平９地点）調査区全体図 …… 26
第２０図　大袋４遺跡（平９地点）出土遺物実測図 …… 27

《 写 真 目 次 》

写 真 1　下志柄遺跡（平９地点）調査風景 …… 5
写 真 2　下志柄遺跡（平９地点）調査風景 …… 5
写 真 3　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物① …… 7
写 真 4　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物② …… 7
写 真 5　間堀２遺跡（平９地点）調査前 …… 10
写 真 6　間堀２遺跡（平９地点）調査風景 …… 10
写 真 7　間堀２遺跡（平９地点）調査風景 …… 10
写 真 8　間堀２遺跡（平９地点）遺物出土状態 …… 11
写 真 9　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物① …… 11
写 真 10　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物② …… 14
写 真 11　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物③ …… 14
写 真 12　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物④ …… 14
写 真 13　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）調査前 …… 16
写 真 14　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）調査風景 …… 16
写 真 15　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）遺構確認状況 …… 16
写 真 16　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）出土遺物① …… 18
写 真 17　北近藤第一地点遺跡（Ｅ地点）出土遺物② …… 18
写 真 18　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）調査前 …… 19
写 真 19　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）調査風景 …… 19
写 真 20　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）遺構確認状況 …… 19
写 真 21　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）出土遺物① …… 21
写 真 22　北近藤第一地点遺跡（Ｆ地点）出土遺物② …… 21
写 真 23　笹原遺跡（平９地点）調査前 …… 23
写 真 24　笹原遺跡（平９地点）調査風景 …… 23
写 真 25　大袋４遺跡（平９地点）調査前 …… 25
写 真 26　大袋４遺跡（平９地点）調査風景 …… 25
写 真 27　大袋４遺跡（平９地点）調査風景 …… 25
写 真 28　大袋４遺跡（平９地点）遺物出土状態 …… 28
写 真 29　大袋４遺跡（平９地点）出土遺物 …… 28

第Ⅰ章　館　林　市　の　環　境

1. 地　理　的　環　境

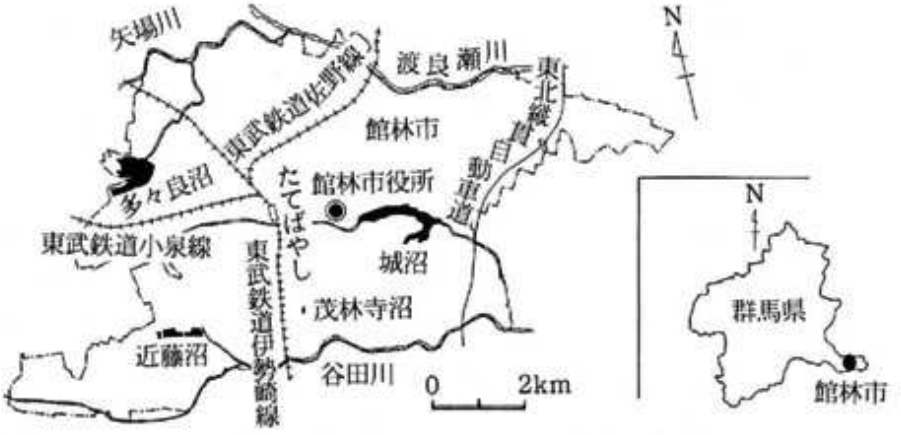
館林市は、群馬県の南東部、上毛カルタでいう「鶴舞う形の群馬県」のちょうど頭の部分に位置する人口8万人弱の地方都市である。

市は関東平野の北辺に位置し、北は渡良瀬川を隔てて栃木県と、南は邑楽郡明和村を越え利根川を境に埼玉県と接している。市域は、東西が約15km、南北は約8km、総面積は約61km²で、南北より東西に長く、また、各都市との結び付きは、県都前橋市までは約50km、首都圏とは東北自動車道で約60kmの距離にある。

地形的には、山国「群馬県」の中にあって館林市はほとんど平坦なところで、標高は最も高い所で32mほど、低い所で15mほどで、県下では最も標高の低い地域である。

市域のほぼ中央部には標高20m前後の高台が東西に連なり、この高台を取り囲むように標高15m前後の低地が広がっている。高台は「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地で関東ローム層で覆われ、西から東に向けて緩やかに傾斜している。その西縁には、幅200mほどの埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）が大泉町古海から、館林市高根町へと連なっており、「邑楽・館林台地」との比高差は5～10mほどである。台地の周囲に広がる低地は沖積低地で、利根・渡良瀬川に連なる大小河川の氾濫原と考えられており、沖積低地中には、自然堤防、旧河道、池沼、河川などがみられる。台地との比高差は5m前後である。

「邑楽・館林台地」の縁辺は良く侵食されており、低地から樹枝状に多くの開析谷がみられ、谷頭に城沼や茂林寺沼をはじめとする大小の池沼群や湿地帯が形成されており、本市の特色ある景観を造り出している。



第1図　館林市の位置図

2. 館林市内の遺跡

「館林市の遺跡」（市内遺跡詳細分布調査報告書）には館林市内の遺跡として144か所の遺跡が登載されている。その内訳は、旧石器時代のもの3か所、縄文時代のもの13か所（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代は0か所、古墳時代から平安時代のもの96か所（内23か所は縄文時代の遺物も散布）古墳17か所、中世生産址1か所、中世城館址12か所、近世城館址2か所となっている（中心となる時代等で分類）。

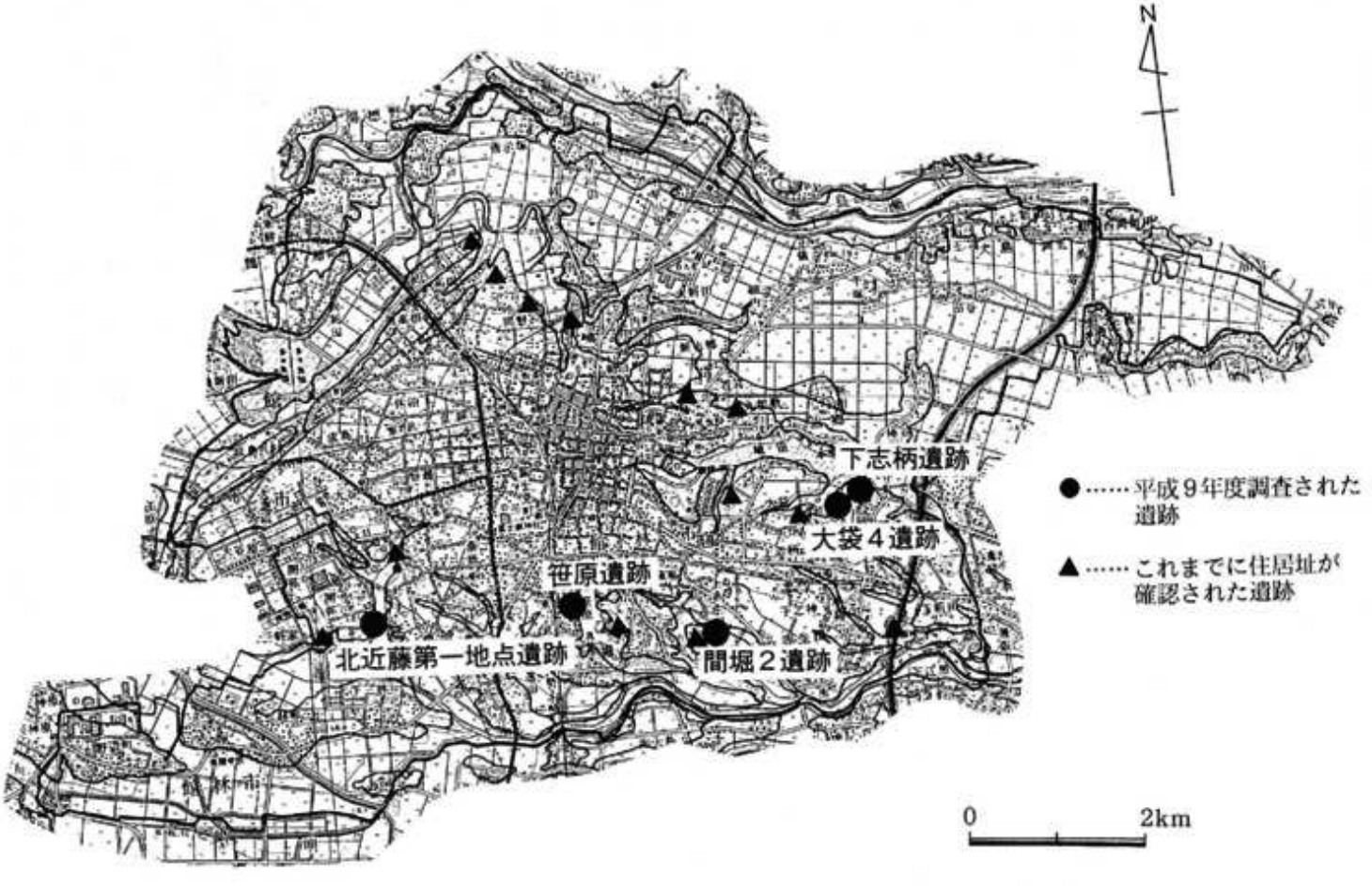
これらの遺跡は、その多くが洪積台地上に分布しているが、時代別にその立地や数に偏りがみられる。原始・古代の遺跡の立地や数の傾向について時代別に概略してみると、旧石器時代の遺跡は、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）等の市内でも最も標高の高い地域に所在する傾向がみられる。縄文時代前期から中期にかけては遺跡の数も増えるとともに、台地上の平坦部に所在する傾向がある。縄文時代後・晩期の遺跡は数も減るだけでなく、台地の斜面や微高地、ともすれば低地にまで及ぶことがある。弥生時代については、遺跡自体が確認できず、わずかながら土器片などの散布がみられるのみである。古墳時代の遺跡は、前期が台地の斜面や微高地に、中期のものは斜面から台地上に、後期では台地上であることが多い。古墳はすべて谷や湿地を見下ろす高台に作られている。奈良・平安時代の遺跡は数が急増するばかりでなく、台地内部への広がりをみせるとともに、台地全面に広がる傾向や、自然堤防上にも広がる傾向をみせる。

こうした遺跡のなかで、特にこれまでの発掘調査（本年度を含む）により住居址等の遺構が確認された遺跡は、15遺跡（複合遺跡を1と数える）ほどある。

縄文時代のもの3遺跡（大袋Ⅱ遺跡、間堀遺跡、加法師遺跡）、弥生時代のもの1遺跡（道満遺跡）、古墳時代のもの11遺跡（大袋4遺跡、大袋城址、高根・外和田遺跡、岡野・屋敷前・岡遺跡、八方遺跡、尾曳町1遺跡、大道北遺跡、北近藤第一地点遺跡、伝右ェ門遺跡、南近藤遺跡、道満遺跡）、奈良時代のもの1遺跡（南近藤遺跡）、平安時代のもの3遺跡（北近藤第一地点遺跡、道満遺跡、下堀工道満遺跡）である。このほかにも、住居址等の遺構は確認されていないが、縄文時代中期の遺物が多く出土した遺跡として笹原遺跡、後・晩期の遺物が大量に出土した遺跡として、大原道東遺跡や上の前遺跡などがある。

古墳については、昭和10年刊行の『上毛古墳綜覧』には67基の古墳が記されているが、現在では、その数は半数以下となっている。これまでに調査され、埋葬施設が確認できた古墳は、高根古墳群の一つの天神二子古墳と渕ノ上古墳の2基のみである。

さらに、市内には中世から近世にかけて多くの城館址があったとされているが、そのいずれも伝説的な要素が多く明確ではない。その中で、近世館林城は江戸幕府において重要な位置をしめる城としてあったばかりでなく、現在の館林市の基礎となったものである。


N
下志柄遺跡
大袋４遺跡
笹原遺跡
北近藤第一地点遺跡
間堀２遺跡
●……平成９年度調査された遺跡
▲……これまでに住居址が確認された遺跡
0
2km

第２図　遺跡分布図

第Ⅱ章　各　遺　跡　の　調　査

第1節　下志柄遺跡（平9地点）

1. 立　地　と　環　境

下志柄遺跡は、館林市街地の東部、城沼から入り込む支谷である古城沼の東岸の高台に所在する縄文時代の遺物を散布する遺跡である。遺跡は、県道「板倉籾谷・館林線」と県道「赤生田・山王線」の交差点の西方約750mの所に位置しており、遺跡の名称は小字名を付して「下志柄遺跡」とした。

遺跡は、邑楽・館林台地を大きく開析する城沼を北に、また城沼から南に向かって入り込む支谷である古城沼を西に望む高台に所在し、遺跡付近の標高は約20m、西側の古城沼の水面との比高差は約3.5mである。

周辺の遺跡には、本遺跡と同じ台地上に大袋4遺跡、下志柄古墳、町谷1古墳、町谷1遺跡等の古墳時代の遺跡や古墳が多く所在している。

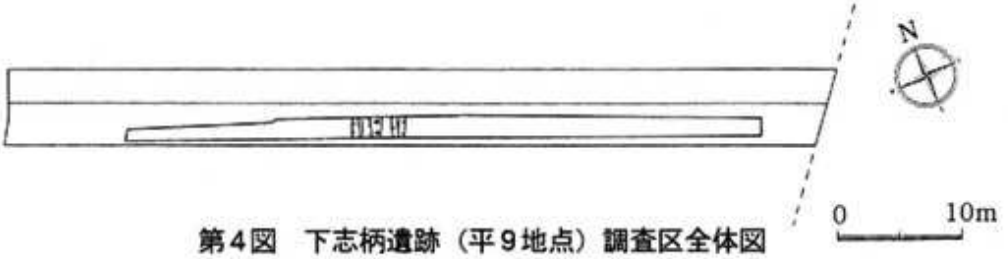
特に、大袋4遺跡では、県道「板倉籾谷・館林線」道路拡張工事に伴い古墳時代中期の住居址2軒が調査されているなど、本遺跡を載せる台地一帯は古くから人が住み着いていたことをうかがわせる。

第3図　下志柄遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

下志柄遺跡（平9地点）の発掘調査は、館林市が実施する市道4222号線の拡幅工事に伴う事前調査として実施した。館林市教育委員会は「館林市の遺跡」に登載された下志柄遺跡の範囲のうち、館林市楠町1968－1が、遺跡のほぼ中央部に位置すること、同時に遺物散布がみられることから、事前に確認調査の必要があるものとして、工事担当課である土木課と協議を重ね工事着手の前に調査を実施した。

調査地は道路拡幅部分であるため、道路に沿って試掘溝（トレンチ）を設定し、土木重機により表土を除去した。この結果、地表面から約30cmの深さでローム面が確認された。その後人力により遺構確認を行うためローム面の精査を行ったところ、ローム層中から縄文土器片の出土がかなりみられた。こうしたことから、土層断面の観察を行いながら、ローム面の掘り下げを行うとともに、遺構の確認を続けたが、比較的新しい時代と想定できる溝状遺構2条を確認できたほかは遺構は確認されなかった。遺物は縄文時代前期を中心とした土器片等が出土した。



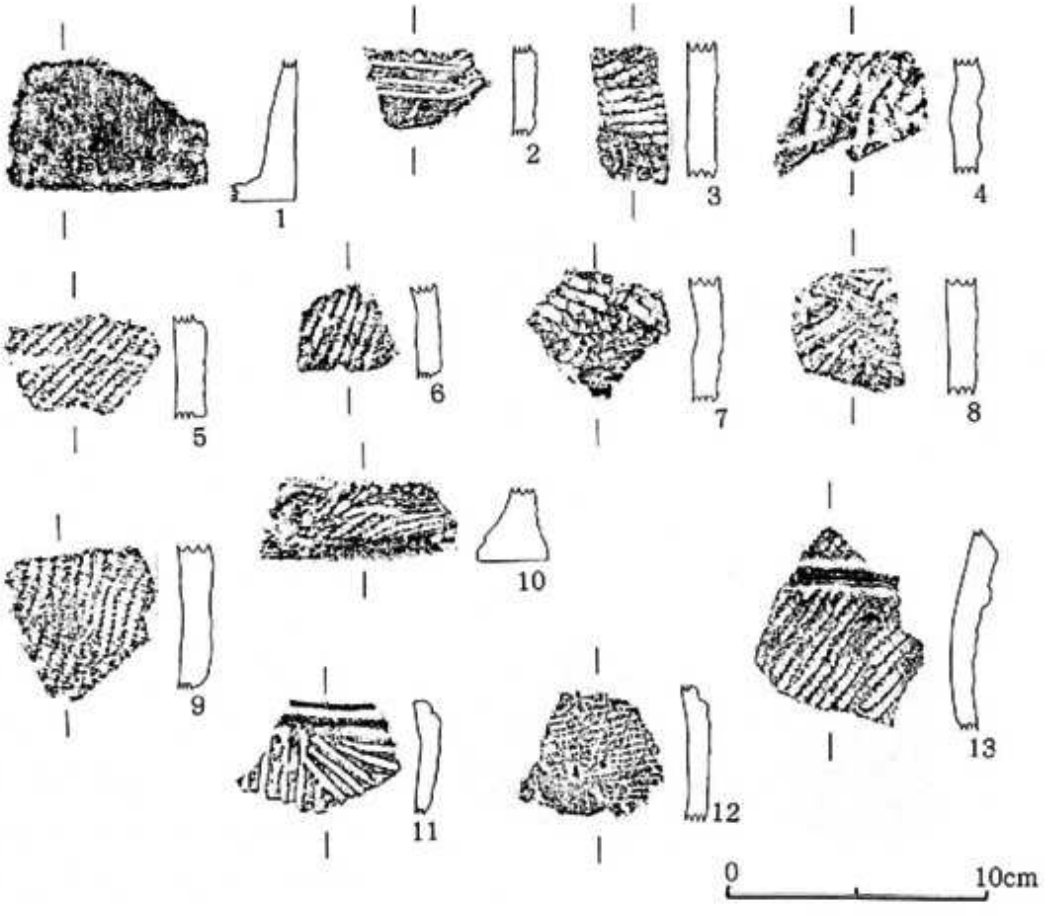
第4図　下志柄遺跡（平9地点）調査区全体図

写真1　下志柄遺跡（平9地点）調査風景

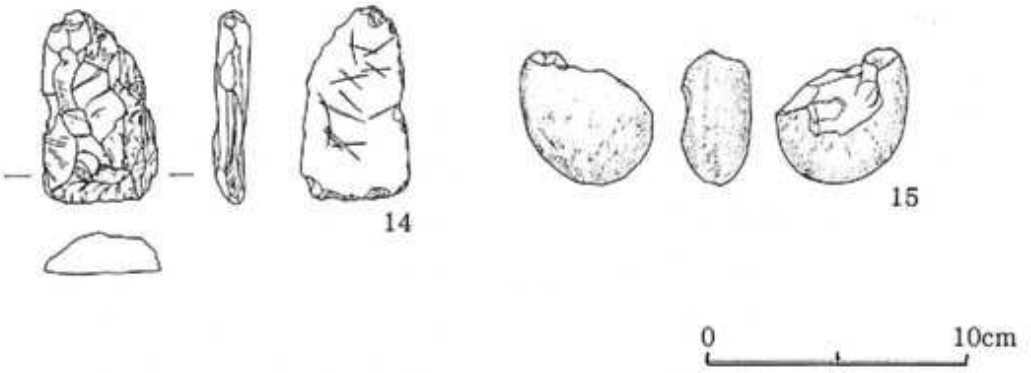
写真2　下志柄遺跡（平9地点）調査風景

3. 出　土　遺　物

⑴は深鉢の底部破片である。胎土には小砂を含み表面に繊維痕が残る。⑵は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈し、もろい。表面に沈線が施されている。⑶は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈し、もろい。表面には縄文が施されている。⑷は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を多く含み、断面はサンドイッチ状でもろい。表面には撚りのあまい縄文が施されている。⑸は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維が含まれているが比較的しっかりしている。表面に縄文。⑹は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含み、断面サンドイッチ状。表面に縄文。⑺は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含み断面はサンドイッチ状でもろい。表面に撚りのあまい縄文。⑻は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含む。焼成良好。表面は撚糸状の縄文。⑼は深鉢の胴部破片。胎土に多量の繊維と少量の小砂を含む。断面はサンドイッチ状。表面



第5図　下志柄遺跡（平9地点）出土遺物実測図及び拓影1



第６図　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影２

写真３　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物①

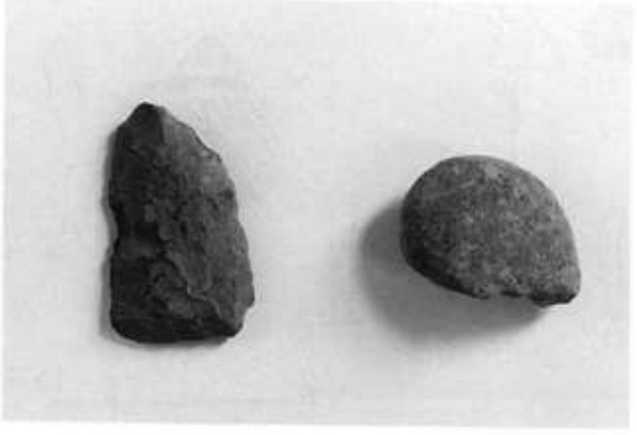


写真４　下志柄遺跡（平９地点）出土遺物②

に縄文。(10)は深鉢の底部破片。底部付近は、いくぶん広がり底部に続く。胎土に繊維を多く含み、断面はサンドイッチ状を呈する。底部は平底で、表面に縄文を施す。底内部は良くなでられているが比較的もろい。(11)は深鉢の口縁破片。口辺は二段になり、胎土に小砂を含む。表面は地文に縄文を施し、竹管による太い沈線が見られる。(12)は深鉢の胴部破片である。胎土には多量の繊維と少量の小砂を含み、断面はサンドイッチ状。焼成良好。表面に緻密な縄文。(13)は深鉢の頸部破片。胎土に小砂を多量混入し厚手である。表面に縄文、太い隆帯を横に回す。(14)は完形の打製石斧。砂岩質の礫の一方に自然面を残し、片面を調整。(15)は磨石。円礫の全体が良く磨られている。半分欠損。

第2節　間 堀 2 遺 跡（平9地点）

1. 立　地　と　環　境

間堀2遺跡は、市街地の南東部、蛇沼の東岸、蛇沼に突出する舌状台地上に所在する縄文時代前期から中期と平安時代の遺物をだす遺跡である。

遺跡は、市立第四中学校の東側に位置しており、遺跡の所在する小字は「間堀」で、遺跡名は小字名を付したが、小さな谷を隔てて散布地が2地点に分かれるため、南側を間堀1遺跡、北側を間堀2遺跡とした。

遺跡は邑楽・館林台地の南辺を深く侵食する谷である蛇沼を南西に望む高台の南斜面に位置しており、周辺の標高は約19m で、間堀1遺跡との間に入り込む谷との比高差は1.5mほどある。

邑楽・館林台地の南辺は比較的良く侵食され、台地は樹枝状にわかれ多くの舌状台地が形成されており、この舌状台地には多くの遺跡が確認されている。

本遺跡周辺には、間堀1遺跡のほか、上の前遺跡、神明前遺跡などの縄文時代の遺跡が所在する。

特に、谷を隔てて南側に隣接する間堀1遺跡では、昭和57年度に縄文時代の住居址7軒が調査されており、周辺一帯が縄文時代の集落址である可能性が高い。

第7図　間堀2遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

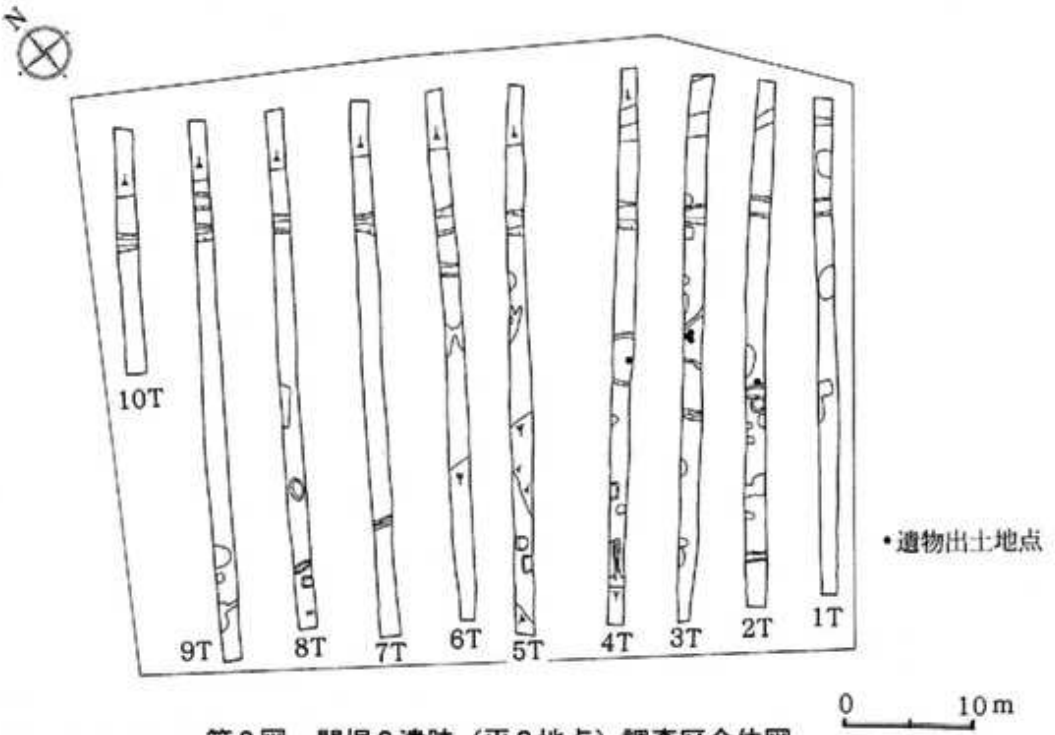
間堀2遺跡（平9地点）の発掘調査は、館林市上赤生田町字間堀4265－1,2,3,4及び4276－1における久保島建設による露天資材置き場及び残土置き場建設に伴う事前調査として実施した。館林市教育委員会では、この土地の開発計画が提出された時点で埋蔵文化財の取り扱いについて、代理人と協議を開始した。

間堀2遺跡は、これまで既往の発掘調査の例がないことばかりか、南側の谷を隔てた間堀1遺跡では縄文時代の住居址等が調査されていること、今回の開発予定区域が遺跡の西側全域に及ぶことから、事前に試掘調査を実施し、地下の状況を確認することとした。

調査地は遺跡の西側全域に及ぶことから、調査は、開発予定地の全域に南北方向に10本のトレンチを設定し、土木重機により表土を取り除いた。トレンチは東から西に向かって1～10トレンチとした。

表土を排除した結果、地表面より約35～40cm 掘り下げたところからローム面を確認したが、3～10トレンチの北側ではローム面は確認されず、黒色土の落ち込みが広がっている状況が確認された。このことから、調査区域北側の地形が落ち込んで谷を形成していたことが判明した。

また、ローム層は調査区中央から、南に向かっても緩やかに傾斜しており、南側は隣地を



第8図　間堀2遺跡（平9地点）調査区全体図

隔てて湿地が存在していることから、本調査区域は、東西に伸びる比較的細長い馬背状の台地であったと考えられた。

また、その他の区域では耕作土とローム面の間にほとんど漸移的な土がみられず、調査区域全体が過去に人為的で大がかりな削平が行われたことが推定された。

表土除去後、各トレンチ内を、人力により掘り下げ遺構確認を行ったところ、3トレンチと4トレンチのほぼ中央部分に縄文時代前期の土器片が集中して出土したが、土の変化による落ち込みは明確にできなかった。また、3トレンチ内でサブトレンチを掘り下げた際中央部分に焼土のブロックが集中してみられた。

こうした状況で、明確に遺構等としてとらえられなかったことから、3・4トレンチ中央部を拡張して遺構確認を行ったが、一部焼土のブロックや小穴はみられるものの、落ち込みの形態も不明であり、遺物も多くなかったことから、住居址等の明確な遺構としてとらえられなかった。

出土遺物としては、調査区全体から縄文前期を中心とした土器片等が出土した。

写真5　間堀2遺跡（平9地点）調査前

写真6　間堀2遺跡（平9地点）調査風景

写真7　間堀2遺跡（平9地点）調査風景

3. 出　土　遺　物

⑴は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈し、焼成は良好。表面に撚りのあまい縄文。⑵は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含み、断面はサンドイッチ状を呈す。焼成は良好。表面に撚りのあまい縄文。薄手。⑶は深鉢の胴部破片。胎土に多量の繊維を含み、断面はサンドイッチ状。焼成は良好、表面に縄文。⑷は深鉢胴部破片。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈す。焼成は良好、表面に撚りのあまい縄文。⑸は深鉢の口縁破片である。胎土に小砂を含む。口縁付近に隆帯の取っ手が付く。地文に縄文を施し竹管による太い沈線を描く。⑹は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含み、断面はサンドイッチ状で焼成は悪い。表面に縄文。⑺は深鉢の口縁破片。口辺は平ら。胎土に多量の繊維を含み、断面はサンドイッチ状。表面に縄文を施す。⑻は深鉢の胴部破片。胎土には繊維を含む。表面に附加条の縄文。焼成良好。⑼は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を含み、断面はサンドイッチ状。表面に附加条の縄文。焼成良好。(10)は深鉢の胴部破片。胎土に繊維及び小砂を含む。断面はサンドイッチ状。表面に撚りのあまい縄文を施す。焼成は悪い。(11)は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維、小砂を含み、断面はサンドイッチ状。焼成良好。表面に縄文。(12)は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を含み、断面はサンドイッチ状を呈す。表面に縄文。焼成良好。(13)は施釉陶器、高台付鉢2分の1個体。口径20.2cm、底径9.2cm、高さ10.2cm を計る。ロクロ仕上げ。緑色の釉をかけている。内部に焼成時の重ね痕を残す。(14)は古銭。「寛永通宝」で径は2.3cm。表採。(15)は施釉陶器、高台付鉢の底部破片。ロクロ仕上げ。青灰色の釉をかけている。内部に焼成時の重ね痕を残す。(16)は軟質陶器の口縁から底部にかけての破片である。焼成は良好であるがもろく胎土に金雲母、小砂を混入する。底は薄い。口径35.0cm、深さ5.9cm、内耳部分は、はがれており、胴部内外にススが付着している。(17)は磨石の完形品。軽石の円礫を利用し、表面は良く磨かれている。コロッケ状。(18)は磨石の破片。凝灰岩質の円礫を利用し、表面は良く磨かれている。裏面は破損。(19)は石皿の破片。軽石状のざらついた石を利用。断面は皿状を呈し、表面に2つのくぼみを有する。

写真8　間堀2遺跡（平9地点）遺物出土状態

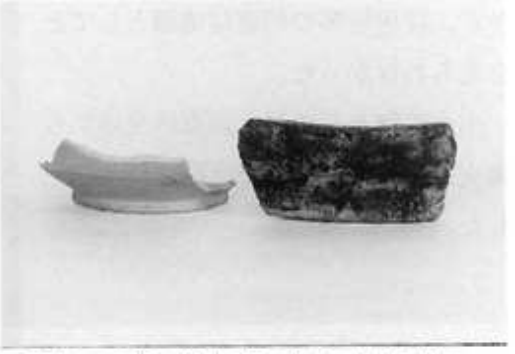
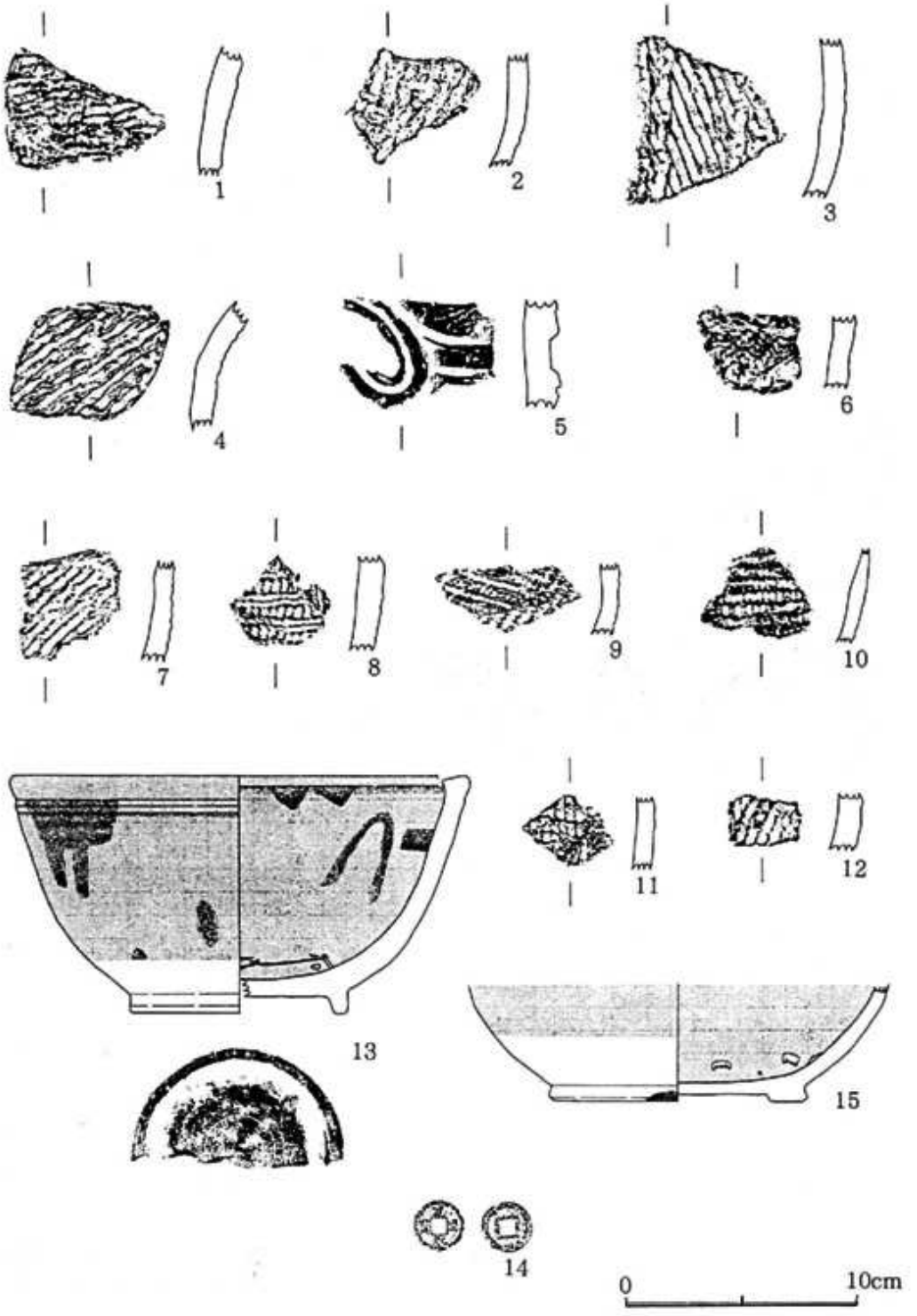
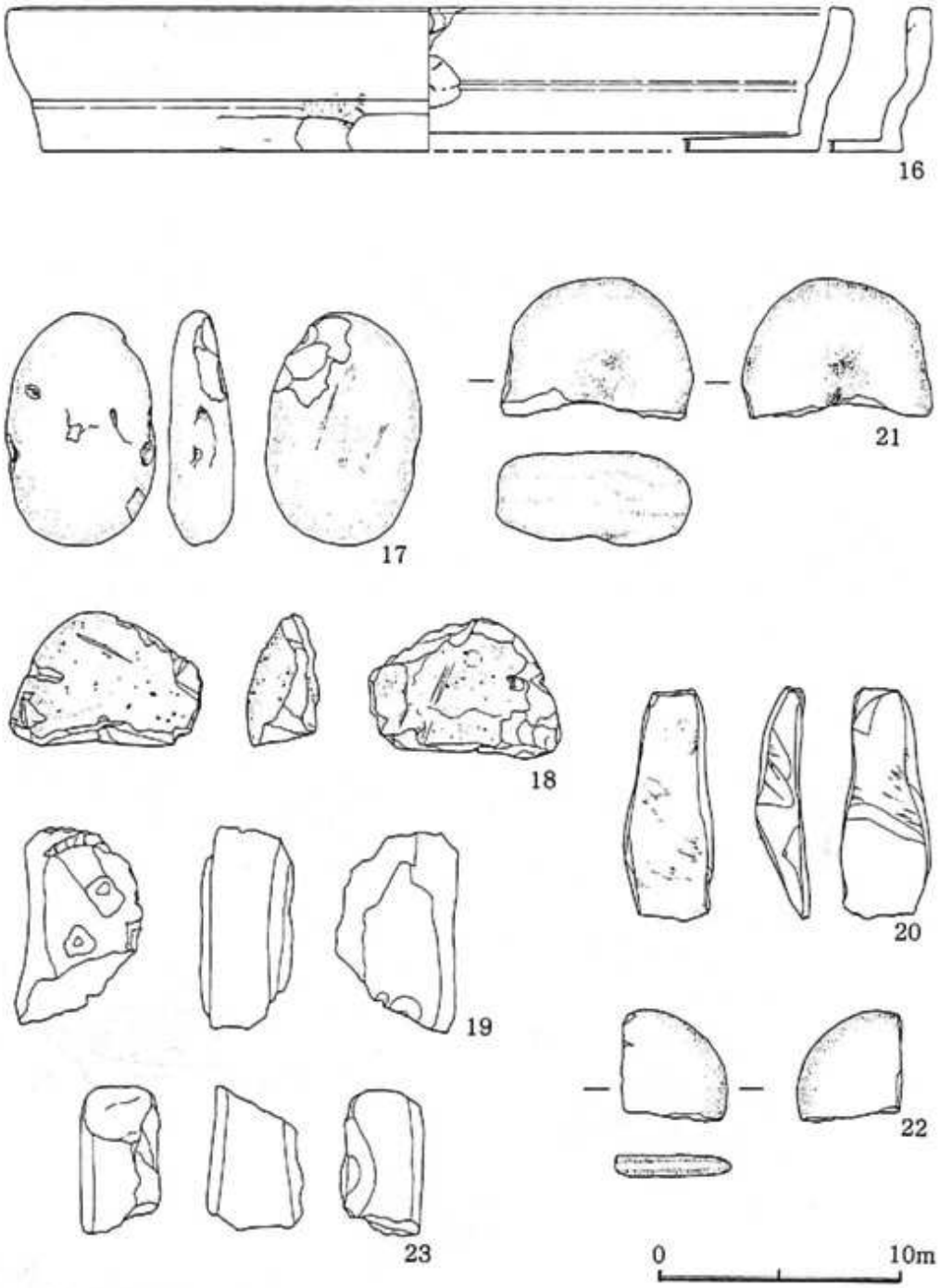


写真9　間堀2遺跡（平9地点）出土遺物①



第９図　間堀２遺跡（平９地点）出土遺物実測図及び拓影１



第10図　間堀2遺跡（平9地点）出土遺物実測図及び拓影2

(20)は砥石。凝灰岩質の緻密な石材を利用。(21)は磨石の2分の1個体。荒い凝灰岩質の石を利用し、表面は良く磨かれている。表裏両面中央にくぼみがある。(22)は磨石の破片。砂岩質の石材を利用。扁平な円盤状を呈し、表裏面とも良く磨かれ平らになっている。側面には叩いた痕が残る。(23)は叩き石の破片。砂岩質の石材を利用。両端は欠損。表面は磨かれた痕跡を残す。

また、図示できなかったが、トレンチ拡張部から、未焼成の粘土が出土している。これについての詳細な報告は後日にゆずることとしたいが、一部分析等において、栃木県埋蔵文化財センター保存処理室の車塚氏の手を煩わせた。

写真10　間堀2遺跡（平9地点）出土遺物②

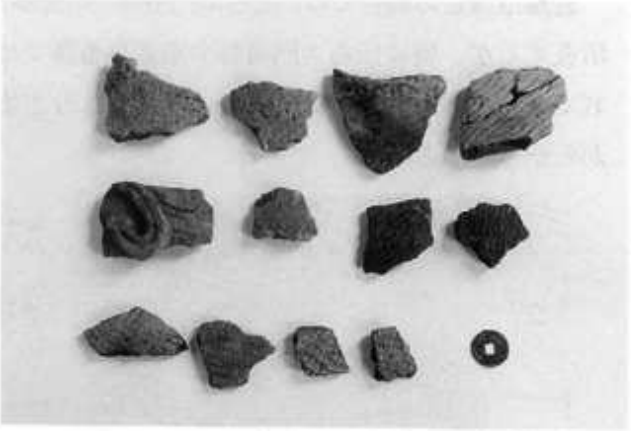


写真11　間堀2遺跡（平9地点）出土遺物③

写真12　間堀2遺跡（平9地点）出土遺物④

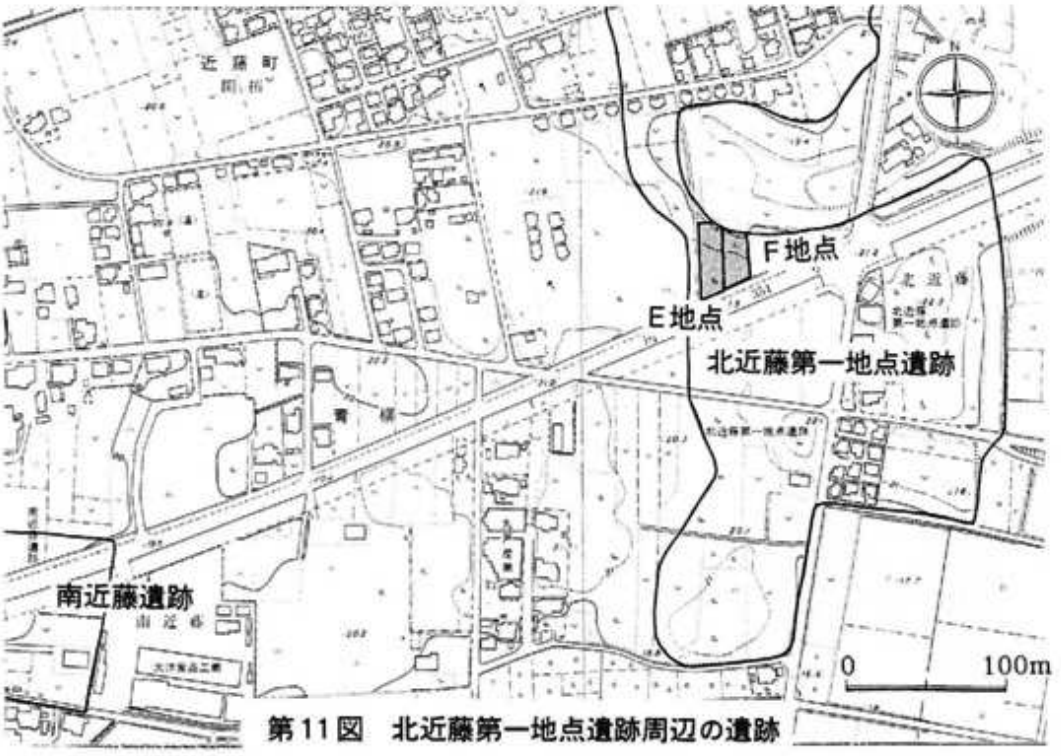
第3節　北近藤第一地点遺跡（E・F地点）

1. 立　地　と　環　境

北近藤第一地点遺跡は、館林市の南西部、近藤沼を南に望む高台に所在する古墳時代から、平安時代にかけての遺跡である。遺跡は、国道354号線と市道1級11号線の交差点周辺に位置しており、遺跡の名称には小字名を付したが、北近藤には市内遺跡詳細分布調査（「館林市の遺跡」作成のための調査）以前から大きく2地点の遺物散布地がみられたため、すでに北近藤第一地点遺跡、北近藤第二地点遺跡の名称が使われてきており、「館林市の遺跡」作成にあたってはそのままの名称を踏襲した。

遺跡は、邑楽・館林台地の南縁の南に近藤沼を望む比較的広い台地上に位置し、遺跡の南には近藤沼に連なる低地帯が広がり、遺跡の東から北側にはこの低地帯からのびる枝谷が深く入り込んでいる。遺跡の標高はおよそ21mで東及び南の低地帯との比高差は4～5mほどである。

近藤沼周辺の高台には、伝右エ門遺跡、南近藤遺跡、北近藤第二地点遺跡等多くの遺跡が所在するが、特に伝右エ門遺跡や南近藤遺跡では古墳時代から平安時代の住居址が調査されており、本遺跡も、これまでの調査により古墳時代から平安時代の集落址であったことがわかっている。



第11図　北近藤第一地点遺跡周辺の遺跡

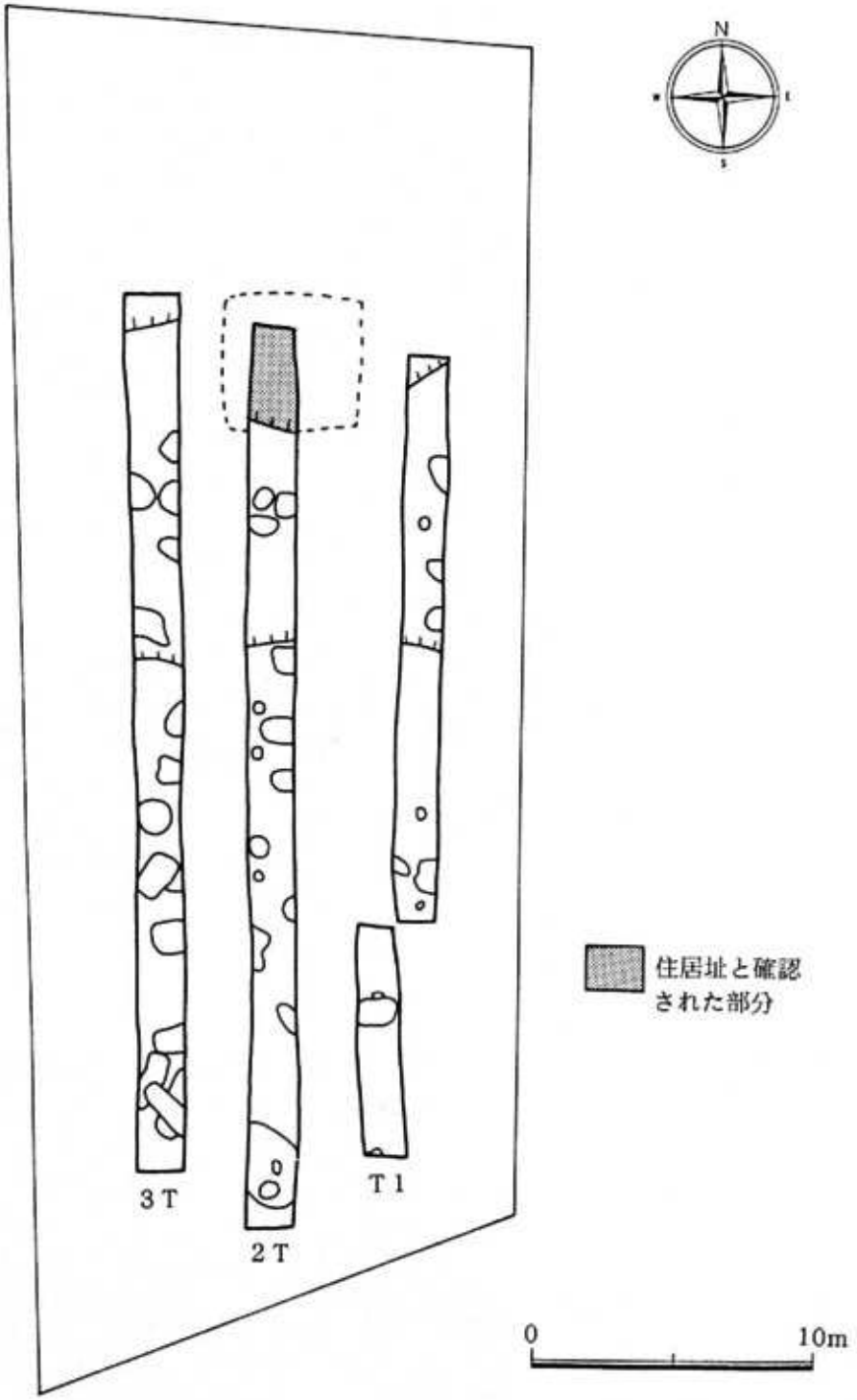
2. 調 査 の 概 要（E地点）

北近藤第一地点遺跡（E地点）の調査は、館林市苗木町字北近藤2526－1の地権者飯島一宏氏の個人開発（ドライブイン建設）に伴う事前調査として実施した。同地はこれまでの調査の経緯から遺構・遺物等の確認される可能性が高い場所であったことから、事前に地下の状況を確認することとし、敷地の形状に合わせ、トレンチ3本（東側から1・2・3トレンチ）を設定し土木重機により表土を取り除いた。この結果トレンチの南側では、地表面下約40cm、北側では地表面下約70cm掘り下げたところからローム面を確認し、調査地の地形が北側の湿地に向かって急激に傾斜していることが予想された。特に2トレンチ北部分には、黒色土が厚く堆積しており、傾斜が著しく人為的な掘り込みである様子がうかがわれたため、サブトレンチを設定し土層等を精査したが、木の根等の撹乱が激しく落ち込みの性格等が明確にできなかったことから、周辺を拡張し平面的に精査を行うとともに再度トレンチ内を精査したところ、古墳時代後期の土器片が多量に出土し、一部復元可能な一括土器の出土や住居の床らしき土層も確認した。平面形から落ち込み部分が住居址の可能性が高いものと判断された。

写真13　北近藤第一地点遺跡（E地点）調査前

写真14　北近藤第一地点遺跡（E地点）調査風景

写真15　北近藤第一地点遺跡（E地点）遺構確認状況

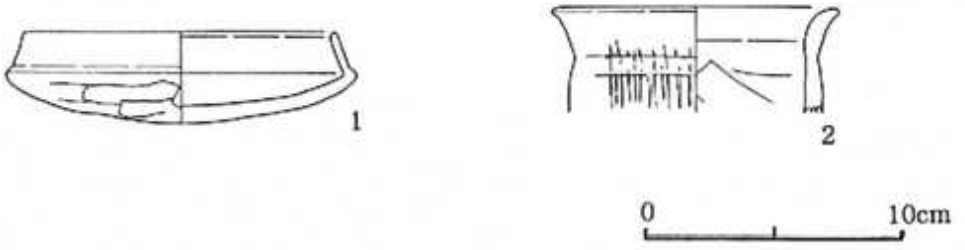


第12図　北近藤第一地点遺跡（E地点）調査区全体図

3. 出　土　遺　物（E地点）

⑴は、土師器坏の5分の3個体である。口径12.0cm、最大径13.5cm、器高3.5cm、器厚3～7mm を計る。扁平な坏で、口縁部は受け部に段を有し、ゆるく外半しながら内部に向けて立ち上がる。胎土には粗い小砂を多量に混入し、焼成は良好であるが、比較的もろい。色調は赤褐色。整形は、口縁部内外横ナデ、外面は不明瞭ではあるがヘラ削り、内面はやはり不明瞭ではあるが、指ナデ、ヘラ磨き。内外面にスス付着。また、小動物の歯咬痕が所々に見られる。古墳時代後期。

⑵は、土師器小甕の口縁。口径は11.2cmと推測され、現高4.0cm、器厚5～7mm を計る。口縁は大きく外半し頸部はくびれて胴部にいたると考えられる。胎土に粗い砂を多量に含み、焼成は良好であるがもろい。色調は明淡褐色。整形は口縁部内外は横ナデ、胴部は外側が櫛目の後に横ナデ、内側はヘラナデである。古墳時代後期。



第13図　北近藤第一地点遺跡（E地点）出土遺物実測図

写真16　北近藤第一地点遺跡（E地点）出土遺物①

写真17　北近藤第一地点遺跡（E地点）出土遺物②

4. 調 査 の 概 要（F地点）

北近藤第一地点遺跡（F地点）の発掘調査は、E地点の開発者である飯島一宏氏による個人開発（ドライブイン建設）の敷地拡大に伴う事前調査として実施した。E地点の発掘調査後、開発関係者が再び教育委員会を訪れ、隣地の館林市苗木町字北近藤2524－1において、計画（敷地）を拡大し開発していきたい旨相談があり、隣地で住居址が確認されていることから、事前に確認調査を行うこととしたものである。

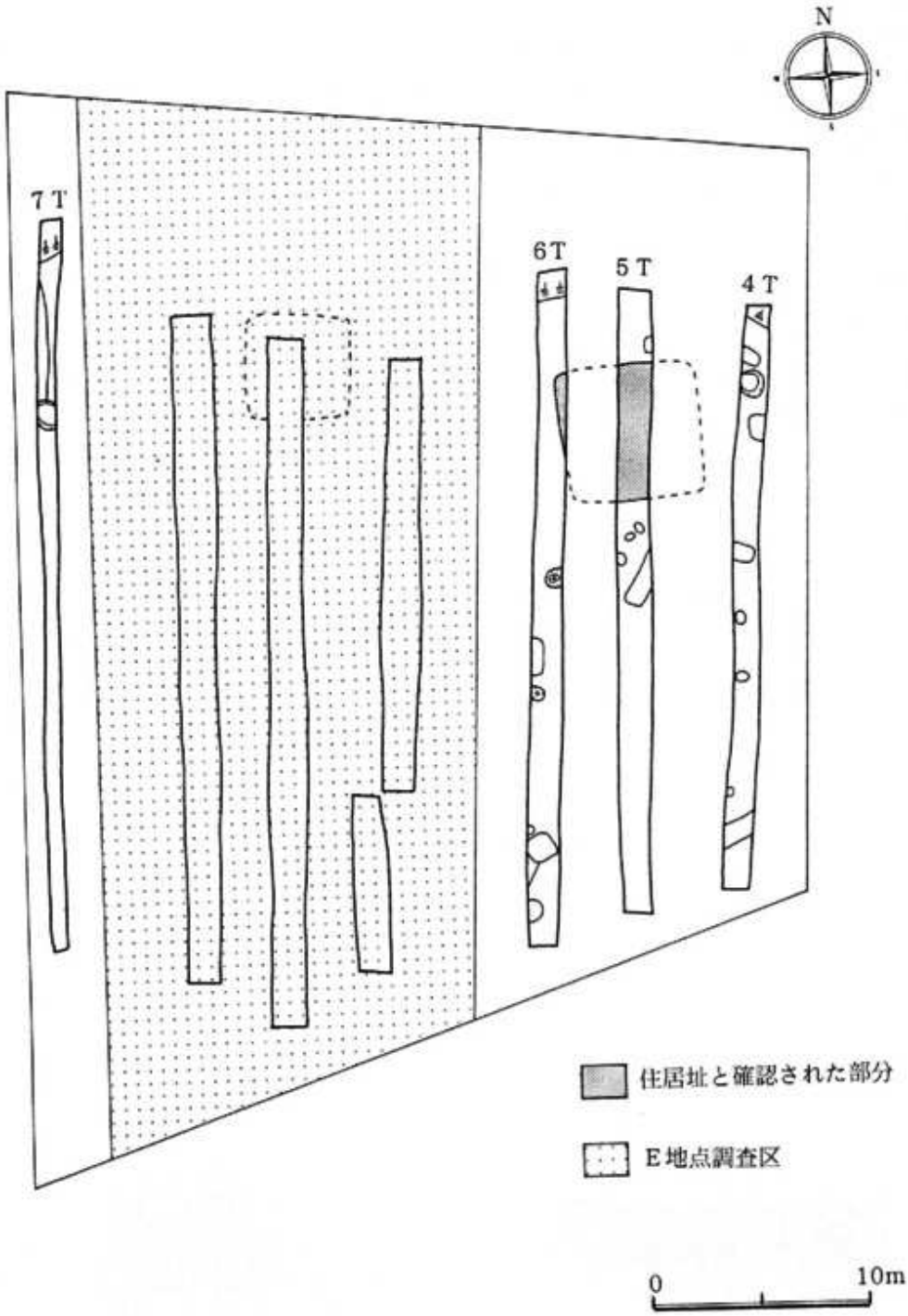
調査は開発予定区域に4本のトレンチを設定し、（東から4・5・6・7トレンチ）E地点同様に土木重機により表土排除をおこなった。

現況の調査区域の地形は、南から北に向かって緩やかに傾斜し、比高差は約1m ある。表土除去の結果、トレンチ南側では地表面下約50cm、北側では約70cm でローム面を確認し、地形は現況どおり、北の湿地に向けて急激に傾斜していることが確認された。トレンチ内を精査した結果、5トレンチ北側部分に黒色土の落ち込みの一部とその北側に焼土や粘土の集中している状況が確認されたため周辺を拡張し、平面的にプランを確認した結果、E地点同様住居址である可能性の高いものと判断された。

写真18　北近藤第一地点遺跡（F地点）調査前

写真19　北近藤第一地点遺跡（F地点）調査風景

写真20　北近藤第一地点遺跡（F地点）遺構確認状況



第14図　北近藤第一地点遺跡（F地点）調査区全体図

5. 出　土　遺　物（F地点）

⑴は土師器坏の口縁部3分の1個体。口径12.0cm、現高2.1cm、器厚3～6mm を計る。扁平な坏で、口縁部は受け部に段を有し、ほぼ垂直に立ち上がる。色調は赤褐色。胎土には金雲母を少量、小砂を多量に含み、焼成は良好であるが、内外面とも表面が荒れもろい。二次焼成の可能性がある。整形は口縁部に指ナデがみられるが、表面が荒れているため観察できない。

⑵は土師器甕の口縁破片。口径は14.7cmと推測され、現高2.8cm、器厚3～8mm を計る。口縁は大きく外半し、頸部がくびれて胴部に至るものと思われる。色調は黒褐色。胎土に粗い砂を多量に含む。焼成は良好で堅くしまっている。整形は口縁部の外面には斜め方向の、内面は横方向の櫛目痕が見られる。

第15図　北近藤第一地点遺跡（F地点）出土遺物実測図

写真21　北近藤第一地点遺跡（F地点）出土遺物①

写真22　北近藤第一地点遺跡（F地点）出土遺物②

第4節　笹　原　遺　跡（平9地点）

1. 立 地 と 環 境

笹原遺跡は館林市街地の南部、茂林寺沼の西岸の茂林寺沼に突出する舌状台地に所在する縄文時代と平安時代の遺物をだす遺跡である。

遺跡は東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の北北東約600mのところに位置し、遺跡の所在する小字名は「笹原」と「法正谷」にまたがっているが、遺跡の大半をしめる「笹原」の字名を付して遺跡名とした。

遺跡は邑楽・館林台地の南辺を深く浸食する谷である「茂林寺沼」を東に望む高台の東斜面に位置し、遺跡付近の標高は約19mで茂林寺沼の水面との比高差は2mほどあるが、その境はなだらかに湿原へと連なっている。

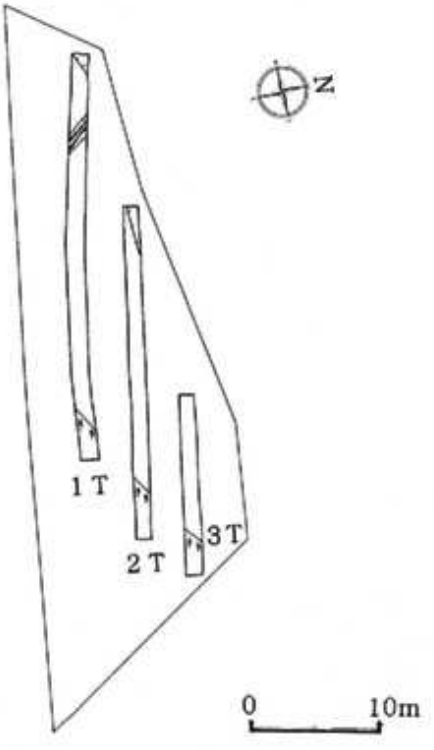
茂林寺沼を取り巻く台地上にはたくさんの遺跡が所在しており、笹原遺跡と同じ茂林寺沼西側の台地には、法正谷遺跡、中山東遺跡、前通遺跡等の平安時代の遺物をだす遺跡が、東側の台地には、腰巻遺跡、咄戸遺跡、咄戸沼遺跡、美園町遺跡、大原道東遺跡等の縄文時代の遺跡のほか、古墳時代～平安時代の遺物をだす下堀工道満遺跡が所在する。

笹原遺跡ではこれまでに何回かの調査が実施されており、昭和58年の調査では縄文時代中期の遺物が多量に出土している。

第16図　笹原遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

笹原遺跡（平9地点）の発掘調査は、館林市によって計画された館林市都市計画道路「茂林寺中通り線」道路改良工事にともなう事前確認調査として実施した。調査は、道路建設予定区域に3本のトレンチ（南側より1～3トレンチ）を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。調査区域の地形は西から東へと緩やかに傾斜しており、その比高差は50cm ほどある。表土排除の結果トレンチの西部分では、地表面から約30cm 掘り下げたところでローム面を確認したが、東部分では表土下に黒色土が厚く堆積し、地表面下約1mほど掘り下げたところでやっとローム面が確認できた。土層状態を観察したところ東部分の黒色土は湿地等に堆積する土であるとともに、ローム面からの湧水も多く、表面は水成化するとともに、酸化鉄等の固まり等も確認できた。ローム面の傾斜は、西側では西から東、南に向けて緩やかに傾斜しているものの、東、南部分では傾斜がきつくなりこのまま茂林寺沼に続くものと考えられた。遺構としては、比較的新しい時代の溝や、地割りの落ち込み等が確認された。出土遺物は縄文時代の土器片が出土しているがいずれも小破片である。



第17図　笹原遺跡（平9地点）調査区全体図

写真23　笹原遺跡（平9地点）調査前

写真24　笹原遺跡（平9地点）調査風景

第5節　大　袋　4　遺　跡（平9地点）

1. 立 地 と 環 境

大袋4遺跡は、館林市街地の東部、古城沼の東岸の台地上に所在する縄文時代から平安時代の遺物をだす遺跡である。

遺跡は県道「板倉籾谷・館林線」と県道「赤生田・山王線」の交差点の南西約1km のところに位置し、遺跡の所在する小字名は、「大袋」と「下志柄」にまたがっているが、「大袋」の字名を付し「大袋4遺跡」とした。

遺跡は邑楽・館林台地を大きく開析する城沼の支谷である古城沼を西及び北に望む高台上に谷を取り囲むように広がりをみせ、遺跡付近の標高は約20m、古城沼との比高差は約3.5mある。

本遺跡の周辺には、縄文時代の遺物をだす下志柄遺跡、平安時代の遺物をだす大袋3遺跡、古墳時代中期の住居址が確認された大袋城遺跡（中世城館）のほか、富士山古墳、下志柄古墳、町谷古墳等の古墳も多く所在している。

また、本遺跡では、平成5年度、県道「板倉籾谷・館林線」道路改良工事に伴って、2軒の古墳時代中期の住居址が発掘調査されており、この高台一帯が古墳時代の集落址であったことが予想されている。

第18図　大袋4遺跡周辺の遺跡

2. 調 査 の 概 要

大袋4遺跡（平9地点）の発掘調査は、館林市楠町字下志柄1918－1，1918－3の地権者の子息石井達也氏により計画された食堂及び個人住宅の建設に伴う事前調査として実施したものである。調査は、開発予定区域内に3本のトレンチ（南から1,2,3トレンチ）を設定し、土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認した。

表土排除の結果、地表面下約20cmのところで、ローム面を確認するとともに、土器片等の出土もみられた。

敷地内のローム面は、ほぼ平らで、いくらか人為的な削平が行われた様子がうかがわれたが、1トレンチの西側及び東側、2トレンチの東側、3トレンチの中央部で遺物の集中する様子がみられたことから、遺物の集中する周辺のローム面を精査するとともに遺構確認を行った。

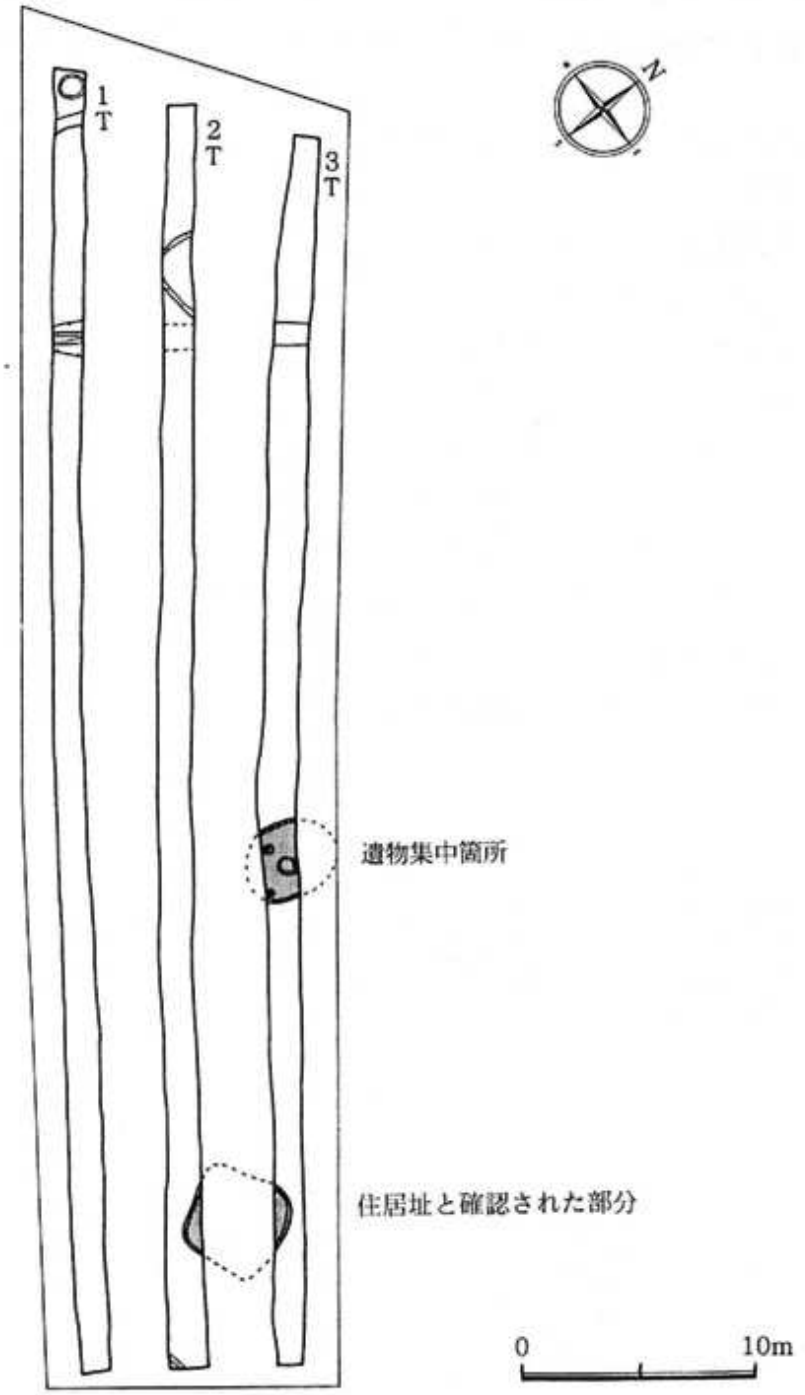
しかし、土器片の出土はみられるものの明確な落ち込み等は確認できなかったため、遺物の集中する箇所を中心に拡張を行い遺構確認につとめ、2トレンチの東側では、住居址と考えられる落ち込みを確認した。

出土遺物は、縄文時代前期の土器片を中心に出土がみられた。

写真25　大袋4遺跡（平9地点）調査前

写真26　大袋4遺跡（平9地点）調査風景

写真27　大袋4遺跡（平9地点）調査風景



第19図　大袋4遺跡（平9地点）調査全体図

2. 出土遺物

⑴は深鉢の口縁部の破片。口唇部は平らである。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈す。焼成は良好、内面は良く磨かれ平らになっている。表面に附加条の縄文を施す。

⑵は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状。焼成は良好、表面に縄文。

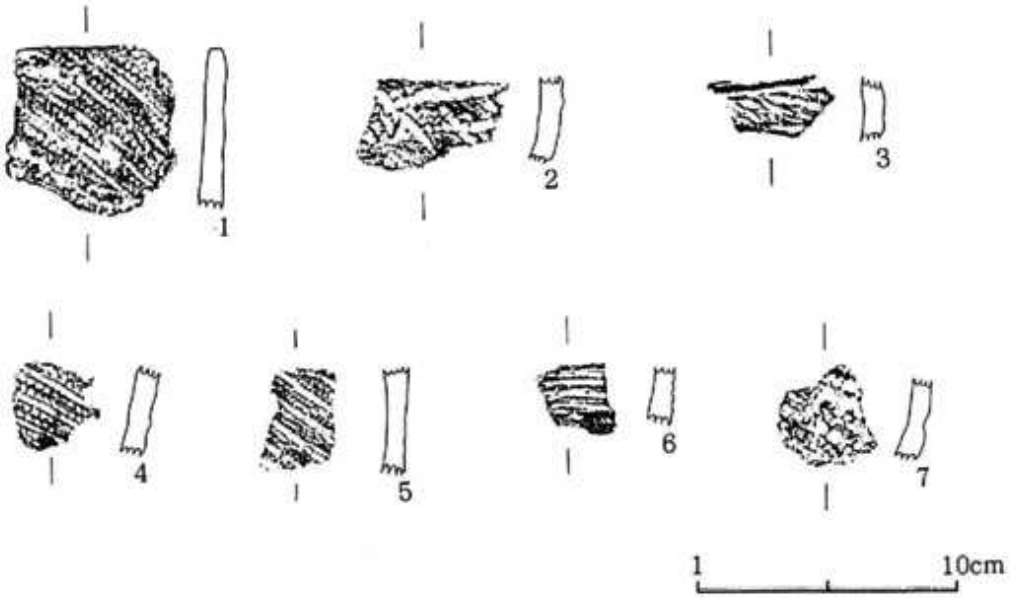
⑶は深鉢の胴部破片。胎土に繊維を多量に含み、断面はサンドイッチ状を呈す。焼成はあまり良くなくもろい。表面に縄文、竹管による隆線が見られる。

⑷は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を含み、断面はサンドイッチ状を呈す。焼成は良好。内面は良く磨かれつるつるしている。表面に附加条の縄文。

⑸は深鉢の胴部破片。胎土に多量の繊維を含み、断面はサンドイッチ状。焼成は良好。内面は良く磨かれている。表面に附加条の縄文を施す。

⑹は深鉢の胴部破片である。胎土に繊維を多く含み、断面はサンドイッチ状を示す。焼成はあまり良くなくもろい。表面は地文に縄文、後に沈線を描く。

⑺は深鉢の胴部破片。胎土に多量の繊維を含み、断面はサンドイッチ状を呈する。焼成は良好。内面は良く磨かれている。表面に結節の縄文を巡らす。



第20図　大袋4遺跡（平9地点）出土遺物実測図

写真28　大袋4遺跡（平9地点）遺物出土状態

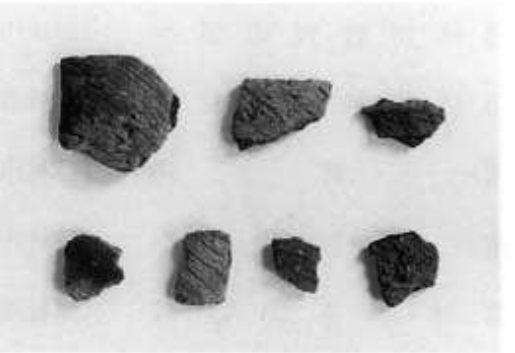


写真29　大袋4遺跡（平9地点）出土遺物

■参考文献

館林市教育委員会	『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第30集
館林市教育委員会	『茂林寺沼および低地湿原調査報告書』第2集（1986）
館林市	『館林市誌　歴史編』（1969）
館林市	『館林市誌　自然編』（1966）
館林市立図書館	『館林双書』第1巻～第25巻
群馬県教育委員会	『群馬県遺跡台帳　東毛編』（1971）
群馬県林務部	『群馬県の貴重な自然　地形・地質編』（1990）
群馬県	『群馬県史　資料編2　原始古代2　弥生・土師』（1986）
群馬県	『群馬県史　資料編1　原始古代1　旧石器・縄文』（1988）
國學院大学文学部考古研究室	『國學院大学文学部考古学実習報告書第5集　壬遺跡』(1983)

その他

抄　録

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書
副書名	――
巻次	――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第32集
編集者名	岡屋英治　岡屋紀子
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374－0018　群馬県館林市城町1－1
発行年月日	西暦　1998年　3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
しもしがら 下志柄 ひらきゅうちてん 平9地点	くすのきちょうあざしもしがら 楠町字下志柄	1207	74	－	－	1997 1997	216.08	道路
きたこんどうだいいちちてん 北近藤第一地点 Eちてん E地点	なすきちょうあざきたこんどう 苗木町字北近藤	1207	53	－	－	1997 1997	803	ドライブイン
とんぼりつ 間堀2 ひらきゅうちてん 平9地点	かみあこうだうまちょうあざとんぼり 上赤生田町字間堀	1207	117	－	－	1997 1997	2,590	資材・残土置き場
きたこんどうだいいちちてん 北近藤第一地点 Fちてん F地点	なすきちょうあざきたこんどう 苗木町字北近藤	1207	53	－	－	1997 1997	405	ドライブイン
ささはら 笹原 ひらきゅうちてん 平9地点	ほりくちょうあざほうしょうや 堀工町字法正谷 あざささはら 字笹原	1207	101	－	－	1998 1998	643.94	道路
おおぶくろよん 大袋4 ひらきゅうちてん 平9地点	くすのきちょうあざしもしがら 楠町字下志柄	1207	73	－	－	1998 1998	761	住宅・食堂

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下志柄平9地点	包蔵地	縄文	－	縄文時代前期土器	
北近藤第一地点 E地点	集落址	古墳	住居址1軒	古墳時代後期土器	
間堀2平9地点	包蔵地	縄文	遺物集中1基	縄文時代前期土器	
北近藤第一地点 F地点	集落址	古墳	住居址1軒	古墳時代後期土器	
笹原平9地点	包蔵地	縄文	－	縄文時代前期土器	
大袋4平9地点	集落址	縄文	住居址1軒 遺物集中1基	縄文時代前期土器	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第32集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印刷所　オーラ印刷有限会社
発行年月日　平成10年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう